

聞名仏教

第 143 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 8 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

聞法者の鑑

よく世間で「医者の不養生、坊主の無信心」ということを申しますが、これはうがったことばだと思いません。どうも坊主は職業が「聞かせ屋」になって「聞き手」にはなり難いものがあります。したがって僧侶で求道聞法の人があるとすれば、それは希有の人と言ふべきでしょう。

とくに僧侶の中でも学識のある方になると、「聞かせ屋」から一步進んで「裁き屋」になり易いものです。ところが大谷派の先哲一蓮院秀存師のみは、一派の学頭でありながら終生聞法の態度を失わず、常に「聞き手」になり「裁かれ手」になられた名師でありました。師は何か胸に不審が起きると先輩後輩の別なく、直ちに教を受けに走られたと聞いております。師が最も信頼をしておられた先輩は香樹院師でありました。あ

る晩のこと、香樹院の宿舎を訪ねて「私はお聖教に向かえば、これは明信仏智と喜ばれますが、自分の胸にかえると気持ちの悪いときがあります、これはどうしたものでしょうか」とお尋ねになると、香樹院師は言下に「そんなことを人に聞いて歩く暇があったら、内で念仏していらいつしやい。」と突き放されたのであります。すると一蓮院は「では不思議と信じて念仏するばかりですか」と再び伺れると、香樹院は、また冷たく「不思議と言えば、今日まで生きてきたことが、早や不思議ではないか」と突き放されたので、一蓮院はもはや言う言葉がなくなつて、念仏もろとも引き下がられたと聞いております。

また一蓮院と常随した同行の信次郎が、ある晩のこと「今夜は某寺にお説教があるから参りたいと思いま

す」と申し上げると、師は喜ばれて、「それはありがたいことである、どうぞよく聞いて帰って、この一蓮院にも聞かせてもらいたい」と申されました。やがて信次郎が帰ると、一蓮院は「今晩のお説教はどうであったか」とお尋ねになったので、信次郎が「今晩の説教は、如来様がこの信次郎を助けると喚んで下さるお話でありました」と答えると、一蓮院は身を動かしてお喜びになり「信次郎や、よいところを聞いて帰ったぞ、今後は、いかなる人の説教を聞いても、そこ一つを聞くのだぞ、他のことを聞いたら必ず迷うから」とお諭しになったということでした。

また一蓮院の道友に大量という方がおられて、岡崎で同行を寄せては法談をしておられたところ、寄り来る同行は日ごとにふえて、一時は盛んなものになったそうです。そのことを聞かれた一蓮院は、法を聞かされた人が集まるのは結構だが、大量師自身が「聞かせ屋」になられては残念だと

案じられて、ある晩のこと、大量師を訪ねて忠言しようとしたのですが、フト自分に立ちかえり、「聞かせ屋は」大量師ではなくて、私自身であったと気づき、一言も忠言もせず、念仏もろとも帰られたということでもあります。

幕末、異安心問題で講師達を悩ましたのは能登の頓成でありました。一蓮院も、その渦中に巻き込まれて随分苦労されたようでありましたが、晩年、人に語つて「私も一時は頓成のために苦しめられたと思いましたが、今から考えて見ると、頓成も私にとつては大善知識であつたと感謝しております」と述懐されたそうです。

香樹院も「同学の講者は沢山あるが、出離の大事について相談のできるのは一蓮院一人である」と述懐された、と聞いております。師は常に蓮を愛し、みずから一蓮院という院号をつけられたそうですが、いかに蓮の如き濁りに染まぬ名師でありました。(了)

現代真宗問答 ⑧

B 「真宗の救いをしばしば
〈そのままのお助け〉〈無条件の救い〉などといわれま

すが、こういうことは何を
根拠にいわれるのですか」

A 「これについて要点のみ
を簡潔に述べますと、それは
アマダ仏のお助けの端的
な表現なのです」

B 「アマダ仏の救いを積尊
は法蔵菩薩の四十八願とそ
の成就として仏説無量寿経
に説いて下さってますね」

A 「ええ、その四十八願の
中の第十八願に説かれたア
ミダ仏の誓願に全ての人が
救われる法が説かれており、
その内容を縮めると〈ソノ
ママナリデ助ケル〉という
アマダ仏の救いの仰せにな
るのです」

B 「第十八願とは」

A 「それは、

たとひわれ仏を得たらんに、十
方の衆生、至心に信樂して、わが
國に生ぜん」と欲ひて、乃至十念せ

ん、もし生ぜずは、正覺を取ら
じ。ただ五逆と誹謗正法とをば除
く。
(仏説無量寿経)

衆生称念すれば必ず往生を得。
(往生礼讃)

という文章です。この中へも

です。この願をどう受け取
るかという点で古来多くの
学僧によって解釈されてき
ましたが、中国の善導大師
が曇鸞・道綽大師など先達
の教を通して、次のように
第十八願の救いを表現され
ました。これは単なる文献
的な解釈ではなくご自身の
深い信仰体験の眼から解釈
されたものです。その後こ
の解釈に、日本の法然聖人
はそれまでの仏教を転換す
るような意味を見出された
のです。すなわち善導大師
の第十八願解釈は

もし我成仏せんに、十方の衆
生、我が名号を称せん、下十声に
至るまで、もし生まれずは正覺を
取らじと。

かの仏、いま現にましまして成
仏したまえり。当に知るべし。本誓
重願虚しからず、

きないようなら、我は仏に
ならない」とまで法蔵菩薩
は誓われたのです」

B 「突き詰めれば〈一声な
りとも称えるばかりで助け
る〉という誓いが第十八願
の救いなのですね」

A 「ええそうです。そして、
この願をどうか信じてくれ
よと如来法蔵様が私たちに
お勧め下さるのが願文でい
えば〈至心に信樂して、わ
が國に生ぜん」と欲ひて〉であ
り、もしこの誓いを疑い捨
てるなら救いから自分を除
いてしまうことになるから、
どうか疑わずに受け容れて
くれよのお心が〈ただ五逆
と誹謗正法とをば除く〉です。
どちらも如来法蔵様の切な
る私たちへの願心です。そ
こで〈乃至十念せん、もし生
ぜずは、正覺を取らじ〉が
善導の〈我が名号を称せん、
下十声に至るまで、もし生
まれずは正覺を取らじ〉に
なるのです。十念とは十声
の称名念仏であると善導大
師は了解されたのです。そ
してこの誓いを法然聖人は
念佛往生の願と言われ、こ
の念仏往生の願を信じる一

つで私たちは助かるのだと
強調されるのが法然・親鸞
両師です。これが真宗の教
えを理解する基本です」

B 「分かりました。ではな
ぜ自力の念仏とか他力の念
仏などと言われるのでしょ
うか」

A 「それは念仏往生の願の〈十
声なりとも一声なりとも称え
るばかりで助ける〉と聞いて、
(じゃあ称えたら助かる)と
受け取って、称えて助かるう
とする場合、それを自力の念
仏と申します。それでなくて
〈一声なりとも称えるばかり
で助ける、そのほかににも
いらぬぞ〉と聞いて〈ああ何
という底抜けの慈悲であろう
か、こんな私をこのままなり
で引き受けてくださるとは〉
と、私が称えるかどうかでは
なく、このままなりで引き受
けて下さる広大なアマダ仏の
慈悲心にびっくりして〈ああ
ありがたい、こんな私を〉と
いただいた人のことを他力の
念仏の人というのです。実際
如来法蔵様の〈一声称える
ばかりで助ける〉という仰
せは、私たちに念仏を称え

もし浄土に往生する事がで

もし浄土に往生する事がで

ることを要求する仰せではありません。〈丸々タスケルの大悲〉を伝えて下さる仰せなのです。これは実感的に理屈なしに分かります。なお第十八願の〈乃至十念〉は念仏のお助けの言葉ではなく救われた後の仏恩報謝の念仏のことだという後代の解釈もありますが、宗祖ご自身は

本願の文に乃至十念と、ちかいたまえり。すでに十念とちかいたまえり。とてしるべし、一念にかぎらずということ。いわんや乃至とちかいたまえり、称名の遍数さだまらずということ。この誓願は、すなわち易行易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり。(一念多念文意)

と仰せられて、ここに〈大慈大悲のきわまりなき〉お心だと感じておられます。これはもはや、称えて助かろうなどと言う余地のない、一声のお念仏に籠もっている広大な大悲に涙しておられるのです。この誓いを聞いて、称えたら助かる、称

えなければ助からぬなどと受け取るのは、まだ自分からかたかたと思っているからです」

B「へただ称えるばかりで助ける」という如来法藏様の仰せが〈ソノママのお助け〉なのですね」

A「ええ、この仰せには私の側に何一つ要求がなく助けるという無条件の救済を表されています。アミダ仏のお助けは

戒律を持ってとも、学問してこそとも、布施を行うものをもと仰せられない。老少、善悪の人を選ばない、また慈悲の心を起こせとも、求道心を起こせとも、欲を少なくしてこそとも、怒りをやめてこそとも仰せられない。喜びの心をもってとも懺悔の心をもってとも仰せられない。仏法をよく聞いて納得せよとも、自身の罪を自覚せよとも仰せられない。本願を信じよ、信じなければ助けないと、疑っているは助けぬとも仰せられない。

〈称えるばかりで助ける、その外に何もいらぬ〉の

仰せが第十八願の救いのみ言葉です。要するに〈唯称仏〉が仰せであり、仰せ下さる私たちの姿を煩惱熾盛の凡夫であり救われざる者と見たまいて〈極重悪人〉と仰せられるのです。ですから念仏している者にとつてこの念仏の仰せはお聞かせ下さる仰せですから、念仏は称えつつも、そこに大悲のお心を聞いているのです。称えている私の行いに力が入っているのではありません。称え出て下さる南無阿弥陀仏を〈ああ有難い〉と聞いているばかりです。なお申しておきますが、ともかくも日頃お念仏を申しているという上での十八願の仰せです。お念仏の無いところではアミダ仏の仰せは単なる観念になってしま

ます。これがまた大事なところ。これがまた大事なところ。〈極重悪人唯称仏〉という〈救われる縁無き者よ、我が名を称えよ、丸々助ける〉の仰せによって大慈大悲のお心にふれ、アミダ仏の大悲が我が心に届いて、仏心が凡心に離れなくなるのです。いわゆるアミダ仏に撰取されるのです。アミダ仏と離れない身になる。ここに救いが我が身に成就したのです」

B「アミダ仏と私が離れない、一体になるということですか」

A「ええアミダ仏と一体になるのです。しかし、それほどまでも私はアミダ仏ではない。煩惱具足の身です。そういう身でありながらアミダ仏と離れないということが知らされてきます。いわゆるアミダ仏と私は不可分不可同ということ、すなわち分けることもできないし、かといって私はアミダ仏と同じではない。しかもどこまでもアミダ仏は救い主であり私はアミダ仏に助けられねばならない者である」ということで、言つて

みれば仏と人は不可逆の関係です」

B「要するにアミダ仏と私たちは不可分不可同不可逆の関係なのですね」

A「ええ、そうです。この関係表現は浄土真宗におけるアミダ仏と人の関係を明確に示していると思います。これはアミダ仏は私を撰取して下さっているという事実であり、宗祖のお言葉で言う〈撰取不捨の真理〉です」

B「そのところですが、アミダ仏の本願を信じたからアミダ仏と私の関係が撰取不捨の関係になったのであり、それまではアミダ仏と私は離れていたのか、という問題です」

A「アミダ仏と人の関係は人がアミダ仏を信じて始めて結ばれる関係というのではなく、人がアミダ仏を信じようと思えば、人が覚ろうが覚るまいが、人としてあるは一個の物として存在しているところにすでに貫徹している関係、それが撰取不捨の真理であり、

不可分不可同不可逆の原関係でありましょう」

B「今までは私から離れていたアミダ仏が、私がアミダ仏の救いを信じたら阿弥陀仏と離れなくなつたというのではなくて、アミダ仏と私たちは初めから離れない身、一体の身であるということですね」

A「ええそうです。ただ迷いの凡夫である私たちは、アミダ仏が私たちと離れない、いわばアミダ仏と一体であるという真理にまつた

く盲目であつて、それゆえ精神的に孤立し、閉塞状態になつて迷ひ転がつてきた身だということなのです。そういう凡夫が、アミダ仏の本願を信じる信心においてアミダ仏が私と離れず、私のいのちの親であることを知る、知らされる、気がつくのでありましょう。それはただ信心と凡心が離れないばかりか、私の存在そのものがアミダ仏の量りないいのちの外にないことを知らされるのです」

B「そうすると、無量寿経

によりますと、法蔵菩薩が一切衆生を救いたいという

広大な願を起し修行して願を成就することによつてアミダ仏になり衆生を救済するはたらきをなしておられるという経説ですが、もともとアミダ仏（法身）と人は法蔵菩薩が出て願行成就しようとしてまいと人はアミダ仏（法性法身）と本来一つであり、アミダ仏を離れて存在しないという真理の中にいるということになります、これらをどう受け取ればいいのですか」

A「もともとアミダ仏と人は撰取不捨の真理の関係の中にあるのです。ただこの関係に人は目覚めていないから、撰取不捨の真理の功徳をいただけず、虚しく流転を重ねているといわれるのです。そこで真理の用きが法蔵菩薩の願行とその成就のかたちをとつて、迷うており流転している衆生にはたらきかけて下さるのです」

B「撰取不捨の真理に盲目である私たちに、この真理に目覚ましめようと法蔵菩

薩として世に現れてくださった、そのことを無量寿経に説いてくださったのです

ね」
A「ええ、迷っているとは外は皆さんと太陽の光を浴びて晴れやかであつても、真つ暗な部屋に閉じこもっているなら、外は明るくても中はいつまでも暗いようなものです。それゆえこの永遠の撰取不捨の真理の広大な功徳にあずからしめた

いと撰取不捨の真理の用きが、法蔵菩薩の願行とその成就そして衆生への回向として、用いて下さるのです。だから法蔵菩薩が願行成就し名号となつて私たちに喚びづめに喚んで下さるこの名号によつて私たちはアミダ仏と私が撰取不捨の関係にいたことを始めて知りこの真理の功徳にあずかることができるのであります」

B「そういう意味の宗祖のお言葉はありますか」
A「こうした如来法蔵様のはたらきは例えば、

とかが
へこの一如よりかたちをあらわして、方便法身ともつす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となつてたてまつりたまえり。この如来を報身ともつす」
(唯信鈔文意)

立てであると仰せくださつています。

このように原初の真実であるアミダ仏（法身）と人の撰取不捨の真理に目覚ましめんがために法蔵菩薩は世に出現して本願を建て、願行成就して南無阿弥陀仏となつて私たちに働きかけて下さっているのだといわれるのです」

B「今回は真宗の根本構造になるところを話して下さり、難しかったですが、真宗の肝要な点と基礎がわかりかけてきました」
(了)

《二〇二一年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名 (敬称略)

青木宏克 赤股弘子 浅野真由美 足立美明 石川紀美子 稻田富恵 井上守 今村光志 岩谷龍 岩田能一 植田節美 小澤譲 改発正浩 小畑住子 香川郁夫 加藤忠 鹿野良子 萱島聖志 川端靖雄 喜多真澄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 城越香織 寿賀晴剛 関有江 谷村往世 津田衛一郎 土居令子 長井一江 中川政二 中野タカ子 中村穂積 中村ホミ子 中村幹夫 西山恭夫 西塚祥子 能登昇志 野原佳子 長谷川満 泰京子 濱秀子 平田幸子 原崎佳水 福村義明 町百合子 三浦一浩 三宅真知子 宮野勲 宮野道子 室塚良治 森野茂治 山下東洋栄 山科瞳 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ蘭睦枝 高田幸子 山下秋喜 伊東清文 宇田聡 山下美保 秋常芳子 中村匡子 山下絹子
合計二三四〇〇〇円 (総額)

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。 合掌